

と。地建の説明を次に要約する。

問一地区民の願いは河口での砂の採取を即停止してもらうことだ。洪の砂が無くなったのは、砂採取のせいではないか

答一建設省は由良川治水に年十億円の予算を取組んでいる。その基本方針は、

福知山より上流は堤防を築くこと、福知山より下流は川底を掘削することによつて沿岸を洪水から守る。これが原則だ。由良川の河口は自然のままでは閉塞する。上流の水害防止のため常時河口では水深五米を川幅百五十米確保する必要がある。河口附近の砂の移動は複雑微妙で更に調査を続けたいと明かさないが、海岸浸蝕は河口の砂採取とは直接関係がない。原因糾明の上、最も有効な方を別に採すべきだが、これは地建の管轄外である。

問一九月十九日の災害の真の原因は河口での砂採取にあると思うか

答一そうは考えない。問一砂の採取を一時でも中止してもらえないか

答一海岸浸蝕の原因が、明かに河口の砂採取にあることが証明されない限り出来ない。

問一由良川治水年間十億円の予算のうち河口の閉塞防止にいくら使っているのか

答一四も使っていない。問一国の事業を採取業者に無料でさせているのは理解に苦しむ。業者は砂を多く売つて利益を上げるため、地建の許可量の数倍の採取をしているのをごどう考えるか

答一そういう事実はない。問一砂の採取が上流の洪水防止のためなら、洪水の絶対にならない十月から翌年の四月までは、採取を止めてもよいのではないかと、少々河口に砂がたまつても、洪水になると直ぐその水勢を押し流され、上流の浸水に左程影響するとは思えないか

答一常時採つていないと洪水に間に合わない。又閉塞はそう簡単に取れない。おおよそ以上のような地建調査課長の説明を聞いて私は腹がたつて仕方なかった。要するに地建は、役所としては当然かも知れないが、上流の洪水防止と、砂採取業者のことしか考えていない。我々は、自治会を中心にして更に強力な運動を展開しなければならぬ。このむづかしい問題を私なりに整理してみると

洪の砂は何処から来たのか

へ運ぶことも、経費は論議が業者に支拂う。

問一河口の砂を採れば、その分だけ洪の砂が河口へ移動するのは、水が低い方へ流れるのと同じで当然である。これを止めるため、川の兩岸の堤防を延長する位置に導流堤を築くこと、現在のような地建の調査では、結論が出ないし、又出す気とも思えない。岸はやつとかることだ。

以上四つの施策を取り敢えず早急に実施するようみんなを強力な住民運動を展開しなければならぬ。住民が業者の犠牲になることはないし、業者が住民の犠牲になるようなこともあつてはならない。しかし河口での砂の採取が、沿岸に東ていることは、業者の方々が、密か知つておられるのではないだろうか。議論の時期はもう過ぎた。日本の宝島良の美しい海岸を取り戻すために、今こそみんな立ち上ろう。



これはやはり由良川の上流からだ。その昔この地に先ず人が住みついたのは石浦と脇で、現在の宮本、洪の路は海だつた。その証拠に旧道は石浦から脇まで山の麓を通つてゐる。由良川河口は以前脇にあつたとは、よく聞く話だ。治水が進むまでは、河口は洪水の度に大きく移動し、人は漸く山すそに家を建て、いたに違いない。それが数千年の間に、洪水で上流から流れて来た砂礫が沖へ流され、波がうち返されて滞積したのが、現在の宮本、洪の路、港地区である。脇部は歴史も古く、独自に奈真神社を持つてゐるのをみて明かた。

戦後なせ洪がなくなつたか

第一に由良川上流の治水が進んで大きな洪水がへり、小さな支流にも石垣や砂止めが造られ、砂礫が流れて来なくなつた。第二に福知山より下流の至る処で、川砂利の採取が行われ、下流で砂となる以前に採られて、経済成長で飛躍的に増加した土木工事その他に使われたこと。第三に問題の河口での砂採取である。近畿地建で昭和四十六年五月から約一年間に、由良川河口で

短日

まん花の哀れ一すじ紅引ける
短日や昏れて通らぬ針のめど
雨戸引く雨月の波の高まりに
虫絶えて磯打つ波の音ばかり
初冬の惨事相次ぎ報道す
身辺のこと整理して冬ごもり
こま女

虚空蔵さんの石塚

山林一小枝子
朝な夕なに仰ぎ見るこの雄大な由良岳の姿を、此処に生を受けた者は、遠く故郷を離れて生活しましても、心れく事の出来ない優雅な姿、心の奥深く秘めてゐる事でしょう。

其の由良岳に登山された方なら、何誰も御存知の虚空蔵様をおまつりしてある小石の塚を御存じでしょう。私が幼い頃に聞いた話を書いてみました。福井県の松尾山と脊比べしましたとこ

一河口での砂の採取を中止してもらう
二由良川沿岸の危険箇所、特に恐地区の堤防を早急に補強工事すること
三砂採取業者の方々に充分な補償を行つこと。国の誤つた施策のため、住民も被害者なら業者の方々も被害者である。今後は砂の販売を一切禁止して、止むを得ず河口で採取した砂は、脇や神崎の浜

許可採取された砂は、約四万立方メートルとつてゐる。これは一〇×三×一三〇〇即ち河口より脇まで約一三〇〇米の海岸で、深さ三米、幅十米の砂の体積となる。十年間で百米の砂浜が無くなつたとすれば、ちようと計算が合う、神崎海岸の消失分は、許可外採取の量と考えたり。このまま浸蝕が進めば、あと五年で次の堤防は決壊する。この由良から美しい自然を取去つたら、果して何が残るだろうか。子数百年か、つてさすかれた白砂青松の海岸が、我々の世代に、しかもたった二十数年間に台なしになるのを黙つて見てゐるわけにはいかない。地建は、海岸浸蝕は日本海一円の問題だと言ふ。目先のことしか考えない経済成長が最大の原因ではないだろうか。

今後とるべき方策は

